



その女にとって、回想のベルギーは冬のフランドル地方のように憂鬱でしかなかった。

女が生まれ育ったパリの記憶は花の香りとともにあるのに、「ヨーロッパのるつぼ」を経験させるべく、父から半ば無理矢理におくりこまれたベルギーの思い出には、色もなければ、なんの香りもなかった。

「いや、ベルギーの思い出にも香りがあったかもしれない」

女は、彼女の口元をみつめながらシャンパーニュを飲んでいる男に、自分の不遇なベルギー時代の話をつづけた。

二人は、神戸御影の「虎丘」にいる。男が女をさそったのだ。男はいまや、世界一の地価である香港「銅鑼湾」から“一時帰還”していた。巨大企業の裏の裏を知り尽くしているトップ会計士である。10年前まで、この男はロサンゼルスにいた。当時、女が知り合いになる男の多くが、アメリカ帰りだったことを思うと、それが今では香港や印度、アラブに北欧と、各国さまざまらばっている。

グローバルという単語を女が肌で感じるのは、こうして世界各地から日本に“一時帰還”した只者ではない日本人男性たちと再会するときで、女にとって彼らは、親友であり、戦友であった。けれど、10年前にボーイフレンドの一人から紹介されたこの男はなかでも特別で、年に一度、男が“一時帰還”したときに一夜をともにする。その年に一度というのは、女の生誕日だった。

つまり、10年間、女は自分が生れた日を同じボーイフレンドとすごしてきたのである。普段手紙でもメールでも、二人の間では直接会話する以外は、一切やりとりをしないので、10年間で10回しか会っていないことになる。その二人が本日の貴重な一日を、神戸御影で過ごしているのだ。

この西洋レストラン「虎丘」とは、香港から帰国した男がどうしても女を連れて行きたかった神戸の名店である。なんでも、日本の旧財閥人が贅を尽した日本庭園と日本家屋を、戦後に中国人の富豪が買い取って、西洋料理屋をはじめたらしい。戦後にして和洋中を融合している点で、グローバル都市KOBЕの象徴である。店名の由来である「虎丘」とは、中国で美しい都市として知られる蘇州にある塔のことだ。

「あたしのベルギー時代は、ママンがイタリア人だった。シチリア出身の、こわい人……。毎日が、ミートボール・スパゲッティなのよ。朝も昼も夜も。どうしてなの？ シチリアってミートボールしかないの？ 私は騒いだものだった。いまでも、あたしはミート・スパゲッティが大嫌いよ！」

「ははは」

女は、テタンジェのブラン・ド・ブランを、ビールを飲むようにのみほした。男が自然に空いたシャンパングラスに次の一杯を注いだ。女がシャンパンを飲んだのは、一ヶ月ほど前、ようやく日本の雑務から開放された女が、一人でパリ旅行にでかけたとき以来だが、そのときとても時間をかけて飲んだクリュッグに比べれば、この日の女は、まるで別人のようにはしゃいでいたが、頭の片隅ではパリの青年をおもいだしていた。

場所は青年の部屋だった。女はシャンパングラスの内側にうまれた星の泡を眺めながら、その青年の美しい手を思い出す。素晴らしい青年ではあったが、あの青年には女を“女”として愛することはできても、女を“女の子”に戻せることはできないな、ということも同時に思いながらも、いつのまにか自分が青年の顔を忘れてしまっていることに気がついた。そうして、いま目の前にいる男をみつめて、ふたたびベルギー時代的话题に戻っていった。

「その当時、あの憎い父からパリ追放されたあたしはね、ブリュッセルでジャーナリスト集団の出版社に見習いに入ったのよ。ブリュッセルで、ジャーナリスト集団に教わるっていったら、わかる？国際スパイの勉強よ」

「それはたいへんだ」

「毎日がお勉強。政治経済歴史に物理数学。とくに統計学……」

「ぼくの得意分野だな」

「そうね。いまだったら、けっこうブリュッセルのジャーナリストたちと楽しめるかもしれないわ。あのころは地獄だったのよね……」

「ベルギーにも、なにかベルギー特有の思い出——色彩や、味や、香りが、あったんだろう？」

「なかったわ……ミートボールくらいしか。いや……そういえば、ベルギーの思い出にも香りがあったかもしれない。うまくおもいだせないけれど」

二人のテーブルのテタンジェの瓶が空っぽになった。

ここで男がソムリエにむかって、手をあげた。ソムリエはあらかじめ抜栓してあった“シャルム・シャンベルタン1986、アンリ・ルブルソー”を、そっと運んできた。二人はしばし、ベルギーの話題から神戸御影「虎丘」に戻り、またここを經由して、ブルゴーニュの葡萄酒畑に思いを馳せた。

「今日のきみにふさわしいワインを考えていたんだ。なんていったって、きみが生れた今日とい

う日は、グレース＝ケリーが生まれ、孫文が生まれ、ノーマン＝ミネタが生まれたんだからね」

「ノーマン＝ミネタ……なつかしいわね。その名前はよけいに今日の私にベルギー時代を思い出させるわ……。あなたの得意分野の、谷山豊……とか、そうねえ、ミヒヤエル・エンデも、あたしとおなじ日に生まれたのよ」

「きみが生まれた日の人物だけで、世界は十分機能するかもしれない。ますます、そんなきみにふさわしいワインは、シャンベルタンだね。このワインを飲む45分前にナポレオンは抜栓させて、45分で会議をおわらせたという話をきいたことがある。デキャンタージュしてしまうと、酸味がつよくなってしまふけれど、45分間はやく抜いたシャンベルタンの香りは、より深くなるんだ」

女は、シャンベルタンを飲みながら、自分がすでに先日パリで一夜かぎり付き合った金髪碧眼青年の顔を、もう一度思い出そうとしてみた。最初、その顔にはモザイクがかかっていた。青年の美しい手とその部屋で食べたエスカルゴの愉悦だけははっきりと残っていたが、そのほかの記憶は本当に消えていたのだ。けれど、シャンベルタンの香りが、女の味覚、嗅覚を心のそこから喜ばせ、それは青年の笑顔につながっていく。

「あたし、あなたの顔はいつでも、ずっとおぼえているのよ」

女が言った。

「そりゃ光栄だね。あらゆる情報に通じているきみの記憶からぼくの顔が抜け落ちていたら、さすがにぼくもかなしいよ」

「そうじゃないの。あたし、ほんとうに恋人の顔だけは記憶からきえていくの」

「職業的習慣か」

「かもね」

「たしかにぼくも12桁の暗算は一瞬でできるが、毎月の酒代は覚えられないんだ」

「それは冗談？」

「かもね」

「冗談じゃないかもしれないわ……」

ナポレオンが愛したブルゴーニュのピノノワールは、孫文やグレース＝ケリーと同じ日に生まれた女との相性がよいのか、女は黙ってしまって、会話もわすれてワインだけをみつめてしばしばんやりしていた。鋭敏で後味をのこさないラトゥールとちがって、シャンベルタンの香気は口のなかに余韻としてのこる。その余韻というものが、女がこれまで忘れてきた一時的、あるいは継続している他の数人の恋人の顔の記憶であるような気がして、女はシャンベルタンを飲んでいるのか、この25年間の華麗なる男性遍歴をふりかえっているのか、区別がつかないくらいだった。

本物のワインを飲む楽しみというのは、いつもこうした記憶の忘れ物との再会にある。

「次は何にしようか」

「うん……」

「じゃがいものフリットがたべたくなくてきちゃった……」

「え？ ポテトフライ？」

「それに……そうね……トランバックのグランクリュ、リースリング……」

男が手を挙げると、さきほどのソムリエがいつのまにか男の隣にやってきたが、どうやら、女が飲みたかったアルザス・リースリングの白ワインはこの店に置いていないようだった。ソムリエは、カンフーガールというアメリカ・ワシントンのリースリングが、フリットにもあうしお薦めだといったので、それにしようという話になったが、女は突然、ハツとして、どうしてもビールを、それもベルギービールを、しかも、ローデンバッハという銘柄を飲みたいと思ったのだった。

「ベルギービールはあるかしら」

「ございます」

「ローデンバッハのクラシック……」

「お客様……残念です。当店100種類ほど、ベルギービールを取り扱っておりますが、ローデンバッハではグランクリュをおいております」

「いいわ。それと、フリットを……オニオンソースをかけてちょうだいね」

「かしこまりました」

ソムリエが、忍者のようにいつのまにか気配を消すと、男は少し驚いて女にいった。

「驚いたな。きみがビールを飲むなんて、この10年ではじめてだよ。それに、いつもヘルシー志向で、一番嫌いなものはドイツ料理だとばかりおもっていたきみが、フリットを愛好するなんて」

「あら。いつもワインとシャンパーニュしか飲まないと思ってた？」

「うーん。アルザスのリースリングがなかったことは残念だが……そう、来年のきみの生誕日には、日本で最高のアルザスワインの店にきみを連れていくよ」

「ううん、いいの。あたし、ほんとうは、この10年、ポテトフライもビールもうけつげなかったのよ。でも今日あなたとなぜかベルギーの話をしているうちに思い出したわ。そう。あたしにとって、ベルギービールとフリット。この二つの“匂い”が唯一、灰色のベルギー時代を彩るなつかしい思い出だったこと」

数ヶ国語を自在に操り、東京オフィスで世界中の情報を操作する女にとって、女自身の思い出

や感情といったものは、次々に忘れ去られていくものとなっていた。女にとって感情、とくに恋愛というのは、いつも冷静な判断を狂わせてしまうゆえ、なるべく自動的に忘れさるように自制してきたのだった。

まもなく、ウェイターがベルギービール「ローデンバッハ・グランクリュ」と、じゃがいものフリット、オニオンソースがけをもってきた。

「あたし、ベルギー時代、週に一度の金曜日の夜だけ、アルバイトと称してバーで働いていたの」

「本当に？ エレガントなお嬢さんに、水商売体験があったなんて、ぼくは知らないことばかりだな」

「そう。もうこの記憶は自分のなかで完全に消去していた類のものかもしれないわ。そうね……あの頃、家にもどればシチリアのママンのミートボールスパゲッティでしょ、仕事にできれば、徹底的に政治経済歴史のお勉強でしょ。もう10代には苦しすぎる毎日だったのね。それではじめて週一回の仕事だったのよ」

「そこでベルギービールの味をおぼえたんだね」

「うん。実は、そのころから好きじゃなかったわ。ビールもフリットも」

「え？」

「いつだったかな。寒い夜だった。ブリュッセルには、いろんなバックパッカーがやってくるんだけど、その日は雨が降っていた。ものすごい雨の日で、客もいなかったのね。そこにずぶ濡れの、バックパッカーが入ってきたの。彼は店に入ってきて、あたしをみるなり叫んだわ。リリィって」

「リリィ？」

「そう。あたしが、コードネーム・リリィを名乗る前のはなしよ。なんだったんだろう、あの晩は。あたしは勿論、そのとき自分がリリィを名乗るなんてしらなかった。だから、当然、その男の子に笑顔でいったわ。あたしはリリィじゃありませんよ、って」

「うん」

「その男の子、なんていったと思う？ アントワープからバックパックを背負って、ブルージュまで旅をした、そこで私とそっくりの女の子に出会って一夜をすごした、名前はリリィだった。そうだったの」

「きみを口説いていたんじゃないの？」

「そう思った。それで相手にしなかった。ただね、その男の子、今度はブルージュからブリュッセルまでまた歩いてきたんだって。野宿しながら。それで、その道中、ずっとリリィのことを考えていたっていうの。それであたしのことを、ずーっとみつめながらビールを飲み続けていたの。その男の子は、あたしがリリィじゃないっていったら、スネたのね。その彼が飲んだビール

の量がすごいよ。もう、どれだけでも飲み続けるの。ずっと、ずうっと、飲み続けるの」

「それが……ローデンバッハ……か」

「そう。それにね、フリットを食べ続けてた。もう、牛が草をたべるみたいだね、次から次へとフリット、フリット、フリット」

「それで君も好きになった？」

「ううん。その日であたし、そのお店をやめたわ。店はその日、うんざりするほどじゃがいもを揚げた。あたしは、油のむせかえる匂いに気持ちが悪くなったわ。それに何十本のビールね」

「何十本?!」

「どうだい……そんなビールとフリットの味は……」

「それが……おいしいの。ベルギービールって……おいしいのね」

女はそういいながら、ビールグラスを少しずつ飲んでた。女にとっては、ワインのようにゴクゴク飲めないようだったが、それでも2本飲んだ。フリットも、一本ずつゆっくりと食べていた。

男はもともとフリットが好きだったから、男も山盛りのフリットをもりもりと食べながら、ベルギービールをごくごく飲んでた。